

---

# アージフ

小沢新都

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アーティフ

### 【Zコード】

Z3000C

### 【作者名】

小沢出新都

### 【あらすじ】

公開しなかつた短編の在庫処分。

此處は神靈とちかしき世界。神が在り、靈が降り、怪奇が振るう。この世界に神の領域を最新鋭の科学で探究せしものたちがいた。その名は國家第一靈科機關アーグジフ。

#

「あーもう、電車が遅れて遅刻だよ。よりによつて車掌が靈障にかかるなんて。」

午前10時、私はようやくアーグジフにたどり着いた。  
アーグジフのオフィスは寂れた雑居ビルの2階にある。私はそこで事務員として働いてた。

「おはよう、神無子くん！最近は不況で線路に地縛靈が多いからね。だが、安心したまえ。僕たちの開発した清めの食塩。これを毎日、ご飯を作るときに使えば靈症になんともう悩まされない。売り出せば大ヒット間違いなしだ。」

「食塩の製造販売ができるのはJ-Tだけですよ。」

よつて、そんなもの開発しても無駄である。

遅刻しても怒られることは無い。緩い職場だ。

朝からハイテンションで話しかけてきた顔は良いのになんとも残念さがただよう男は、アーグジフの所長、杵柄だ。

「よくきたな。待ちくたびれたぞ。」

そして何故か偉そうに話すサングラスをつけたやたら渋い男がバイトの貞夫だ。

アーグジフを構成するのはこの3名である。たつたの3名だ。

「待つてたつて何かあるの？」

ぶつちやけた話、3人だけといつことで、事務員の仕事もそんなにない。

神無子は一人の研究を見学したり、たまに手伝つたりするのが常だ。

「ついにあれが完成したのだ。」

貞夫がサングラスをくいつとあげ、にやりと笑う。

「そう！僕たちの1年かけた偉大なるプロジェクト！」

「それつてもしかして！」

私も声を張り上げ、驚いた声を出した。とりあえずまつたく思い出せないから、一緒に騒いでおこう。もしかしたら、話している内容でなんのことかわかるかもしねれないし。

「付喪神の生成だ。」

貞夫よ、感謝する。

#

付喪神、ご存じですか？

長年大事につかわれた道具に魂が宿り、低級神化するものです。説明終わり。

そんなわけで、私は一人に連れられ研究室にやつてきた。

「なんですか、これ？」

私は思わず呟いた。

「見てわからんか？」

そう言われて私は目の前にあるものをもう一度見た。

まずは気密性の高そうなガラスケース。分厚いガラスの直方体がある。その中には砂利や小石がたくさんしきつめられて、線香と呪符のようなものがところどころ散らばっている。それらが入ったケースを支えるのは机ほどの大きさの機械で、管が伸びガラスケースとつながっている。モーター音が研究室の中に響く。

それ自体はまあぎりぎり変哲のない装置と言えよ。スーパーマーケットに置いてあつたら驚くが、研究室にあるのは不自然ではない。

しかしそのガラスケースの中心にひとつ似つかわしくないものがある。それは…。

「桜餅？」

「その通りだ。」

貞夫は鷹揚につなずく。

「え？ これ何やってるの？」

「だからさつきから付喪神の生成だといつてただろう。この装置はガラスの中を無菌状態を保ち、水と空気を一定の状態で循環させる。桜餅もあらかじめ滅菌処理が行われている。これにより桜餅を腐らせず、常にみずみずしい状態で保つことができる。下には恐山から取つてきた小石を滅菌処理したものが入つている。これによりケース内に靈的磁場を発生させている。これで1年という短期間でもこの桜餅から付喪神がうまれるはずだ。」

「なんで桜餅でやる！」

「ふつふつふ、科学とは未知の分野に挑むものさ。使い古した道具から付喪神を生むなんていうのは平安時代からやられていること。それでは何の発見も成果もない。」

「そこで生菓子でやつてみたというわけだ。わかつたか？」

「お前らが馬鹿だということはわかつた。」

#

そしてついに装置から桜餅を取り出すことになつたなつたらしい。

ついにとかいつたが、心底どうでもいい。本当にどうでもいい。

「さあ、世界初、桜餅の付喪神の登場だ。人類の新たなる大きな第一歩だよ。」

「確実に道端の溝に足を突つ込む方向ですけどね。」

「よし、やるぞ。」

普段はスカした態度の貞夫だが、今日は少し興奮ぎみだ。ピンセツトで捕まれた桜餅がむにっと形を変える。

装置の性能は良かつたらしい。桜餅は一年経つた今でも食べられそうだ。食べる気はまったくないが。

桜餅が和紙の上に置かれる。和紙は台座に固定され宙に浮くようになっている。丈夫なので桜餅が載つても破けることはない。その上にも和紙が置かれ、ちょうど和紙で桜餅がサンドされるようになる。

そして靈符を取り出した貞夫は、和紙の下の空間にそれを張り付ける。

靈氣和紙転写法といって靈符の靈力を下から当て、神靈磁界を引き起こし靈現象を拡大し観察する方法だ。和紙には微量の靈気が織り込まれ、心靈現象に感應するようになっている。

「来るぞ。」

靈符が光を放ち発動する。放たれた光は和紙にあたり、感光部に文字を描き出す。靈符に与えられた形質はそこで遮られ、靈力の余波が桜餅の現世を揺さぶっていく。

そして靈符の光が収まつたころ。

しーん

「何も起きないですね。」

何も起きなかつた。本当に。

所長も貞夫も動かない。たぶんショックだつたのだろう。研究室に沈黙があちる。

「では、帰りましょうか。」

私は一人そう取り仕切ると、バッグをもつて帰ろうとする。だが。

「いや、まで！」

貞夫がいきなり再起動し、それを引きとめた。

「え、なに？まだ何があるの？」

今日はスーパーの特売日で、激安卵を狙つている私としてはなるべく早く帰りたかった。

「これを見てくれ。」

そう言つて貞夫は、桜餅の上に置かれた和紙を指でさした。

「えっと…。」

なんか染みがついている? ようにしか見えない。桜餅の水分でもついたのだろうか。

「これは!」

しかし所長の反応は違った。

「すぐに解析しよう。」

そう言つて、所長は桜餅の上にのつていた和紙を、スキャナーの中に入れる。

「あれってなんなの?」

状況が理解できないのでパソコンの前に座つた貞夫に聞いてみる。「あれは、精霊現象かもしれん。神化するまでには至らなかつた桜餅の魂が、そのまま精霊化し我々に何らかの意思を伝えよつとしている可能性がある。」

そう言いながら貞夫は、スキャンされた画像をソフトに取り込み解析していく。

「やはり、精霊文字の一種だな。魂の輪廻により、表意文字が集合意識体に溶け込み再構成されたものだ。意思是希釈され薄弱だが、積算すれば何か意思をもつた言葉へとなるはずだ。」

「さあ、精霊よ! 僕たちに何をつたえようとしたんだい!」

貞夫がエンターを強く叩くと、画面に文字が表示される。

『ちゃんと食べてください(怒)』

ディスプレイの白いバックにそれだけ映つている。

「怨念になつちゃつてるじゃない。」

私は呆れて呟いた。

#

桜餅を所長と貞夫に食べさせた後、会議することになつた。

「さて、今回の研究成果で、桜餅から付喪神を生じさせるにはちゃんと食べなければいけないことがわかつた。」

「いい加減桜餅から離れなさいよ。」

何故か会議をしきる貞夫に突っ込む。

「困った問題だね。桜餅を一年間食べ続けることは難しいよ。確實に途中で無くなってしまう。」

こいつら聞いたやいねえ。

「たくさん突っ込んでおいたらダメなんですか？」

「ダメだな。桜餅という形態は、餡子とそれを覆う生地で構成される。桜餅がたくさんあっても、それぞれでしか個は形成されない。」

「それじゃあ無理なんじやないですか？もうあきらめましょ。」

ただでさえアホらしい企画に、スーパーの特売の時間が迫っている私は、積極的に計画をとん挫させる方向に誘導することにした。「くつ…、不可能なのか。桜餅から神を生むために費やした僕たちの努力は無駄だつたのか…。」

そんな努力無駄でいいよ、と言いたい。

「いや、諦めることはない。」

「貞夫くん！？アイディアがあるのかい。」

貞夫は不敵にサングラスを上げ笑った。

「無いなら作ればいい。」

そして私がスーパーの特売に間に合つ可能性は潰えた。貞夫は死ねばいい。

#

「さて、準備は完了だね。」

10畳はあるうかという部屋に、私たちはいた。ここは完全隔離された滅菌室だ。私たちも入るに当たって、特殊な処置をうけた上、マスクと作業衣をつけている。

「借りるのに多少無理をいつたが、これなら完璧だろ。」  
貞夫が中を見て不敵に笑う。

「滅菌培養され加工された道明寺粉、小豆、食紅、砂糖の搬入も完

了した。」

「よし、では作業を開始しよう。」

「はーい…。」

気合十分の所長たちに、私の返事はもちろんやる気ない。

「うう、巨大プリンならともかく、巨大桜餅なんて気が進まない。」

「あまり喋るな。バイオセーフティレベル3相当の滅菌処理とはいえ、完璧じやない。万が一コンタミネーションを起こし、腐敗が起こればいちからやり直しだぞ。」

そもそもなんで事務員の私がと思ったがやり直しはしたくないのを黙る。

まず、小豆に水を加え中火で煮る。下処理は搬入前にやつておいた。

灰汁が浮いてくるので、こまめに取つて行く。一度水を捨て、かかる位の水を入れ煮ながら小豆をつぶしていく。またしばらく煮て、頃合いが来たら砂糖を加えていく。

砂糖が溶けたら焦げないように少しづつかき混ぜながら煮詰めていく。

しばらく煮たら出来上がり。といつても、作る量が半端ではない。なるべく大きな鍋を用意したが、それでも3回ぐらいは作ることになつた。

次は生地だ。巨大なボールに道明寺粉を「ぼぼぼぼ」と注ぎ込んでいく。それに食紅をばさばさと加え、少し温めた滅菌水をどぼどぼ加える。そしたらしばらく放置だ。

そのうちに大量の餡を丸める作業に入る。3人がかりで必死に形を整えていく。確実に人間よりでかい。

ボールを蒸し器に入れ蒸す。これだけの量なので、時間は感に頼るしかない。2時間ほど蒸したら、取り出して砂糖をどかつと加える。棒を使ってみんなで混ぜる。腕がきつい…。

そして滅菌されたシートの上に広げ、ひらべつたくする。

巨大なあんをその上に乗せ、包んだら完成だ。

「出来たあ…。」「

「やつたね！」

「完成だな。」

「総作業時間6時間、田の前にそびえたつのは巨大な桜餅だった。

#

それから私たちの生活は変わった。

「よし、今日も異常無しだね。」

毎日、無菌室に出勤し、滅菌処理を受けた後、桜餅が置いてある部屋に入る。菌が繁殖してないかチェックをする。

「さあ、今日の分だ。食べたまえ。」

貞夫が渡してきた皿には切り分けられた桜餅の欠片が乗っている。「ええっ…、また餡子の部分？」

「仕方ないよ、餡子が8割を構成してるんだから。」

ぱくっとみんなで食べる。大味だが意外とよくできていた。そうして私たちは、毎日巨大桜餅を少しづつ食べ続けた。

雨の日も。

「つう、びしょぬれ…。」

「よく乾かせ。カビには気をつけねばなるまい。」

風の日も。

「もう餡子はいやあああ。」

「仕方ないね。餅の部分をあげよう。大事に食べるんだよ。」

嵐の日も。

「休んでいい?」

「だめだ。」

そして一年の月日が流れた。

「さあ、ついにこの時が来た。我々の追い求めてきたものが、今日の前にある。」

「個人的には追い求めたく無かつたんですけどね。」

田の前には一年間食べ続けた桜餅がある。あれだけあつた巨大桜餅も、今日の前にあるのは5センチメートルほどの欠片だ。

「さあ、実験の準備は完了だよ。靈符を発動させよう。」

そう言つて所長が、靈符に触れようとしたときだった。  
ぴかーん

桜餅がひとりでに光りだした。

「何をやつた、杵柄。」

「ぼ、僕はなにもしてないよ！？」

桜餅は発光して中に浮き始める。

「いつたい何が起こつてゐの…」

「わからん。」

「ええ！ちょっとお…。」

騒ぎ出す私たちを置いて、桜餅はぴかつと一際大きく光を放つ。

「きやあつ！」

「うわつ！」

驚いて目をつぶる。

やがて光が收まり、目を開けると。

「なにこれ…。」

目の前には巨大な桜餅がいた。最初に作つたときと同じ大きさ。でも、何かちがう。そう黒い大きな点々が一つあつた。まるで目みたいに。

「どうか、さつきよろつと動いてまばたきした。田だ。確實に田だ。」

桜餅についた田は、一度ほじぱちぱち瞬きすると。少し恥ずかしそうに頬を染め、というか元からピンク色だが、私たちに話かけた。  
『は、はじめまして。』

#

正氣に戻つた二人が、解析した結果、このピンクの巨大な桜餅は

靈体で、まさしく桜餅の付喪神だということがわかった。

『一年もの間、大切にたべてくださいがありがとうござります。お陰で私、付喪神になることが出来ました。』

貴重な滅菌室なんだから、実験がすんだら帰つてくれと叩きだされた私たちは、元のアージフのオフィスで桜餅の付喪神と会話する。『皆さんには感謝してもしきれません。本当にありがとうございます。』

桜餅の付喪神は、ほにやつと微笑んでくる。

「いいえ、それほどでも…。」

終盤、私は餡子に飽きてちょっとしか食べなかつたので、何故か

その無邪気な笑顔に罪悪感を感じる。

『それで、私何をしたらいいのでしょうか。』

付喪神は体を斜め30度に傾けて言つた。そういうば付喪神を呼び出して何をするのかは聞いてなかつた。そう思つた私も所長たちに尋ねる。

「どうするんですか?これから。」

「うむ。終わりだ。」

貞夫がなぜか答える。

「は? 終わり?」

「呼び出すのが目的だつたからね。これで実験は終つた。」

所長もやり遂げた爽やかな笑顔で肯定する。

「じゃあ、この付喪神の子はどうするんですか?」

付喪神も話を聞いていて、不安そうに私たちを見つめてくる。

「まったく何も考えていいなかつた。」

そう偉そうに言い放つた貞夫を、私は思いつきり殴つた。

#

「ふつ、今日は間に合つた。」

めずらしくオフィスに定刻通り出勤した私。

「おはよっ、神無子くん。」

「所長、おはよっ」やります。」

「よく来たな。」

「貞夫もおはよっ…。」

朝の挨拶を交わす。

『おはよっ、さくらちゃん。』

「おはよっ、さくらちゃん。」

可愛い声で話しかかれ、私は笑顔で振り向いて挨拶した。

あれから桜餅の付喪神は、さくらちゃんと名付けられ、アーティストのオフィスに住むことになった。本体は滅菌ケースに入れられる。

最初は戸惑つたが、性格は良いし、姿もピンクの丸いのにくいくりの目と可愛い。ちょっと大きすぎるが、そこも見慣れてくると癒される。

変な男ふたりしかいなかつたことより、職場の雰囲気は比べ物にならないほど良くなつた。

『神無子さん、頼まれていた書類のコピーできましたー。』

「ありがとー、さくらちゃん」

ふよふよと宙に浮かびやつてきたさくらちゃんの体には書類のコピーがひつついている。私はそれをペリッとはがして受け取る。付喪神として騒靈現象ぐらいは起こせるので、雑務ぐらいは朝飯前だ。仕事だつて手伝ってくれる。

私とさくらちゃんとの仲は友達といふやうになつてきた。

さくらちゃんと一緒に仕事をして、さくらちゃんと一緒にTVを見て、二人で和菓子について語り合つ。時には洋菓子のことで喧嘩をしたり、お茶を飲んで仲直りしたり、楽しい日々はあつという間に過ぎて行つた。

そんなさくらちゃんの元気が無くなつてきたのは、一ヶ月ほど経つた頃だつた。

『はあ…。』

窓の外を向いて溜息をはくさくらちゃんの姿を発見する。

「どうしたの、さくらちゃん？」

『いえ、なんでもありません。』

さくらちゃんは笑顔で体を振るが、その表情は明らかに無理しているとわかった。

「無理しないで辛い」とがあるなら話して！私はさくらちゃんの友達だよ？さくらちゃんが悩んでいるなら、相談にのりたいし、力だつて貸したいよ。」

『神無子さん…。』

「そうだよ。僕たちは友達やー。」

「ああ、その通りだ。」

お前らは入ってこなぐでいい。どうかいけ。

『みなさん…。』

素直なさくらちゃんは感動して大きな皿をつるつるやせる。

『私、鳥さんたちを見ていたんです。』

「飛びたいのか？浮いてるから十分だろ？。」

「お前はちょっと黙れ。」

貞夫を殴つて沈黙させる。

『いえ、飛びたいとかじやなくて。鳥さんたちはパンくずを食べていました。』

「それがどうしたの…？」

『鳥さんたちはパンくずをどんなに細かいものでも、拾つて全部たべてしましました。私、うりやおしくなったんです。ちぎられてばらばらになつても、あのパンは最後まで食べて貰えて…。そして思つたんです。私も最後まで食べて欲しいって。』

『えつ？ちょっと待つて！確かに少し残つてゐけど、あれを食べちゃつたらさくらちゃんは。』

『憑代を失つては、付喪神は形を保てないよ。君は消滅してしまつ。』

『わかつています…。私、今でもとつても幸せです。楽しくて優し

い三人と一緒に過ごさせてとても幸福です。でも…、私は食べ物なんです。食べられることが、残さず食べてもいいことが、一番の幸せなんです。』

「ダメよ…。そんなこと…。」

せつからく仲良くなつたさくらちゃんと別れたくない。私は震える声で否定の言葉を紡ぎます。

「いや、食べてやるわ。」

しかしそれは強く静かな声で遮られた。

「所長!？」

「神無子くん、君はいいのかい? サクラちゃんの悲しい横顔を見て平気なのかい? 確かにさくらちゃんとの別れは辛いかもしれない。それでもさくらちゃんが本当に幸せになれるのなら、それを叶えてあげるのが友達としてできることじゃないのかい?」

「俺も賛成だ。だがお前に強制はしない。自分の意志で自分で決めろ。」

所長と貞夫の瞳が、私を見つめる。

私の頭にこれまでの思い出が浮かんできた。さくらちゃんの窓を覗いているときの切なそうな顔、時折つく溜息、そして何より自分たちを癒してくれた優しい笑顔。

「わたし…、わたしは…。」

さくらちゃんと私の瞳が合わせる。真剣な瞳が私に強い気持ちを伝えてくる。

「わたしたちます…。さくらちゃんを食べます。」

私は頷いた。友達としてそうしなければいけなかつた。

そしてお別れの日はやつてきた。その日がくるまで私はさくらちゃんを連れて遊びまわつた。食糧持ち込み禁止をかいぐり、テーマパークで遊んだり、一緒にショッピングをしたり、時間がある限りおしゃべりをした。

3人の目の前には切り分けられた、最後の桜餅がある。

「本当にいいの?」

『はい、お願ひします。』

神無子の問いかけに、さくらちゃんは頷く。

「それじゃあ頂きます。」

それぞれ、田の前のひとかけらを、口に放り込んでいく。  
甘くて、もう飽きてしばりてしまふべからずとおもっていた餡子  
なのに、今日は何故か少しショバなくて美味しかった。

「美味しかったよ。」ちわわちゃん、さくらちゃん。

『みなさん、本当にありがとうございました。私は神無子さんたちと  
出会えて本当に良かったです。』

「わたしもさくらちゃんと出会えて楽しかったよ。」

さくらちゃんの体がだんだんと薄くなつていく。

『みなさん、さよならです。』

涙で景色が滲んでこき、ぼやけて見えなくなる。それでもわかる。  
さくらちゃんが最後に幸せそうにわらつたのが。

#

「さうしてさくらちゃんは天国に旅だつていきました。」

靈文化科学省の予算会議、プレゼンテーション役を務めた私はえ  
つぐえつぐと思いだし泣きしながら報告を終えた。

「きっと天国でも幸せに暮らしていけるよ。」

「ああ、お前は良くやつた。」

そんな私を、所長と貞夫が慰める。そんな所長の田も少し潤み、  
貞夫のサングラスからも水滴がこぼれてきている。

空を見上げると、いつだつてさくらちゃんの幸せそうな笑顔が浮  
かんでくる。

そして国家第一靈科機関アージフの次期予算は〇に減らされた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3000u/>

---

アージフ

2011年6月23日21時25分発行